なんぼくしてき
南北市糴
第16号
2021

- 原の辻遺跡　令和２年度調査成果
- 東アジア国際シンポジウム『土を盛り、石を築く －土木・建築技術にみる東アジア交流－』
- 令和２年度 県内発掘調査概要
  佐世保要塞砲兵連隊衛戍病院跡・早岐瀬戸遺跡・津吹遺跡
  一乗院遺跡・島原道路関連・根引池遺跡・石屋洞穴
- 精密分析・保存処理
- 壱岐高校生徒の研究発表
- オープン収蔵展示紹介

原の辻遺跡（令和２年度）調査

発行／長崎県埋蔵文化財センター
〒811-5322
長崎県壱岐市芦辺町 深江鶴亀触 515-1
TEL：0920-45-4080 FAX：0920-45-4082

原の辻遺跡 令和２年度調査成果

原の辻遺跡の丘陵部の北端から北におおよそ300m離れた、閏繰地区という小さな谷状の地形の西側において、２か月間の発掘調査を実施しました！

令和２年11月と12月の２か月間、原の辻遺跡の丘陵部の北端から北におおよそ300m離れた、閏繰（みやくり）地区という小さな谷状の地形の西側（県道23号勝本石田線の近くの水田）において、発掘調査を実施しました。閏繰地区は過去の調査では、谷状の地形の東側に沿うようにして、弥生時代中期のお墓が並んで確認されています。令和元年度には、こうしたお墓の並びを確認するために、谷状の地形の中央から東寄りの場所で調査を実施しましたが、造成土が厚く盛られており、当時の状況を詳しく知ることはできませんでした。そこで令和２年度には、令和元年度の調査地より１段低い水田を調査地とし、次の３つのことを知ることができました。

①弥生時代中期ごろには、幡鉾川本流に向かって北から南に勢いよく流れる支流があり、奈良時代ごろには埋もれて沼地のようになっていったこと

②弥生時代中期ごろまでは調査地周辺では人が生活しており、奈良時代になると古代の道が通過する場所になったと考えられること

③谷状地形の中心部は、弥生時代より後には沼地のような場所であったこと

この成果によって、原の辻丘陵北側の地区の様相を、より一層明らかにすることができ、②の弥生時代の生活場所がどこまで広がるのかなど、新しい課題を見つけることができました。

東アジア国際シンポジウム

『土を盛り、石を築く －土木・建築技術にみる東アジア交流－ 』

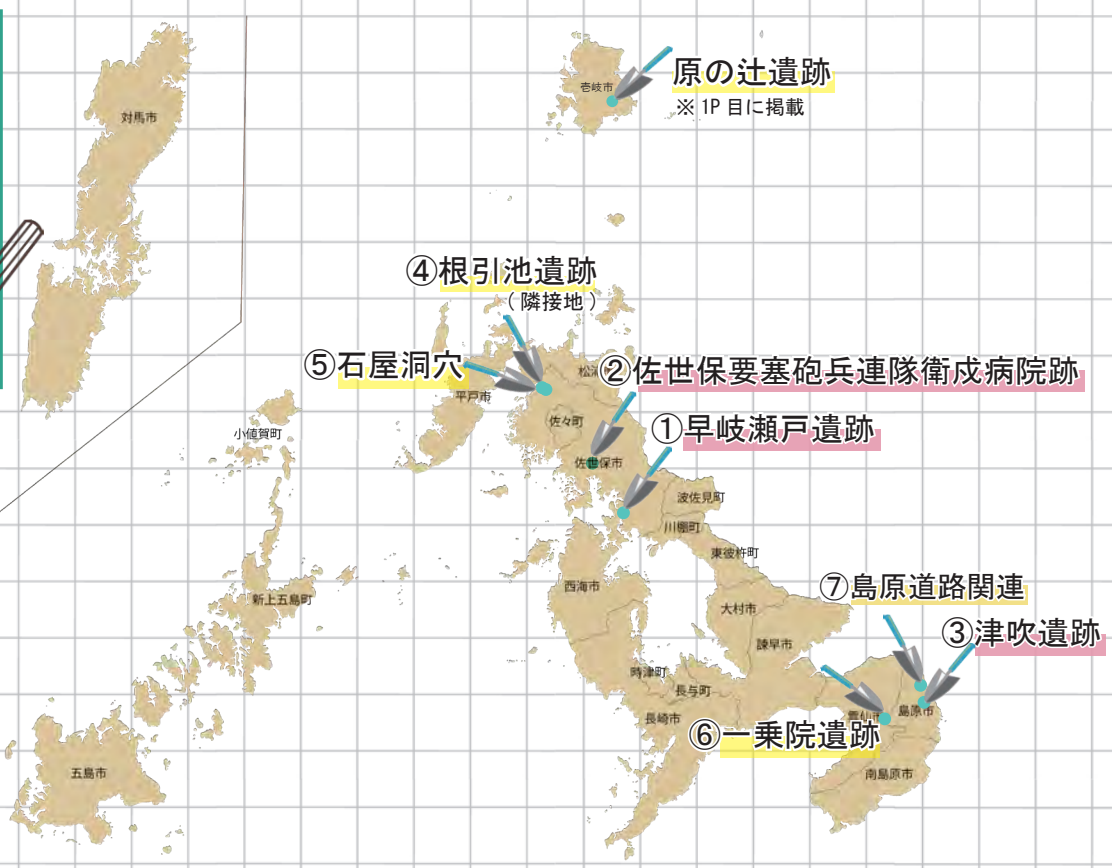
令和２年10月４日（日）、長崎歴史文化博物館において東アジア国際シンポジウムを開催しました。今年は新型コロナウイルスの影響もあり、友好機関協定を締結している韓国・釜山博物館などの外国の機関からの参加が叶わず、会場も人数制限を設けるなど、例年とは違った形での開催となりました。

シンポジウムでは、大阪府立狭山池博物館館長の工楽善通氏から「土木技術の源流を訪ねて」と題して基調講演をしていただき、奈良大学の小山田宏一教授からは「東アジアにおける原の辻遺跡船着き場突堤の土木技術」と題して講演していただきました。また、当センターからは白石渓冴主任文化財保護主事が「原の辻遺跡の船着き場跡」と題して講演を行いました。

講演では、弥生時代に東アジアの交流の場となった原の辻遺跡の船着き場に、現在の土木工学的技術の礎ともなっている胴木や捨石、土嚢などの技法がすでに使われていたことが解説されました。そしてその技術がどのような形で大陸から伝来してきたのかという伝来のルートの問題についてなど、新たな研究成果が披露され、会場からは驚きの声が上がっていました。

パネルディスカッションでは今後、防人の島である対馬も含め大陸との交易の実態を解明していく事が、東アジアにとっても大きな意義を持つと、これからの調査研究への期待と重要性が強調されました。

令和２年度
県内発掘調査概要



①早岐瀬戸（はいきせと）遺跡（佐世保市早岐）

早岐瀬戸遺跡は佐世保市南部の早岐地区に位置し大村湾と佐世保湾を結ぶ早岐瀬戸に面する遺跡で、早岐川河川改修工事に伴い令和元年度から発掘調査を行っています。早岐地区は古くから水陸の交通の結節点となる要衝地で、現在も５～６月には「早岐茶市」が開かれ、お茶、海産物、焼き物などが各地から集まります。また、かつての茶市では物々交換で商いが行われていました。

遺跡周辺は江戸時代の初めに平戸藩により埋め立てが行われたと記録にあり、それ以降に町が整備され宿場町、港町として栄えました。また、近年の発掘調査で肥前陶磁器の積出港であったとも考えられています。

昨年度の調査では、井戸跡や建物跡、かまど跡など江戸時代の遺構の下から、埋め立て工事に伴う石垣護岸を 15 基確認しました。新旧の石垣の間隔が 1m ほどしかないものもあり、少しずつ海に向かって土地を広げていったことが分かります。また、三川内焼や波佐見焼、有田焼、唐津焼などの肥前陶磁や下駄、櫛（くし）などの木製品がコンテナで 600 箱出土しました。調査は令和３年度も継続します。

▲出土遺物　肥前磁器

▲出土遺物　櫛

遺物集中区

SW1（手前）と SW2（奥）

②佐世保要塞砲兵連隊衛戍（えいじゅ）病院跡

（佐世保市万徳町）

佐世保要塞砲兵連隊衛戍病院跡は、佐世保市万徳町に位置します。これまで、砲兵連隊新設時の図面が見つかっていましたが、令和２年８月の佐世保市教育委員会文化財課の試掘調査でレンガ基礎が出土したことを受け、新たに「周知の埋蔵文化財包蔵地（いわゆる遺跡）」になりました。今回、県立佐世保こども・女性・障害者支援センターの新築移転に伴い、発掘調査を実施しました。

明治22年に西方の拠点として佐世保鎮守府が開庁したことにより、地方の一寒村であった佐世保には仕事を求めて大勢の人が押し寄せました。明治30年ごろからは鎮守府を守るために旧陸軍によって佐世保要塞が構築され、その一部として現在の佐世保市立清水中学校の地に砲兵連隊（重砲兵大隊・連隊）が置かれました。砲兵連隊では、榴弾砲や臼砲、小銃などの火器を扱い、日々その訓練が行われたようです。衛戍病院は、この砲兵連隊に付属し、今回はそのうち「管理所」と「附属家」と呼ばれるエリアを発掘しました。

発掘調査の結果、遺構ではレンガ基礎やトイレ遺構、遺物ではレンガ、ガラス、陶磁器、金属製品などが出土しました。調査地は、病院の後に県立ろう学校、旧保立小学校プール、駐車場として使われており、遺構の一部は破壊されていましたが、新設時の図面と重ねるとほぼ図面のとおりの配置で検出できました。

今回の調査では、多くのレンガが出土しましたが、レンガは全て手作業で造られています。また、一部のレンガには、製造社や検品などを示す刻印が打たれ、数種類の刻印が見つかっています。そのうち「一」や「亠」の刻印は佐世保市江上町大島で製造されたものであることが分かっていますが、その他の刻印については今後さらに調査が必要になります。

本遺跡は、戦争の記憶を残す遺跡であるとともに、明治期のレンガを用いた建築技術、さらにレンガの製造・流通に関わる人々の在り方などを考える上で重要であり、今後の整理作業で調査成果をまとめていきます。

出土したレンガ構造物

発掘調査の様子

③津吹遺跡（島原市津吹町）

土石流の地層断面

黒色土の調査

島原半島の火山性台地中腹あたりの広域農道沿いにある縄文・弥生時代の遺跡です。見上げれば雲仙普賢岳がそびえ、眼下には有明海が、晴れた日には対岸の熊本をくっきりと見渡すことができます。周辺には同じく縄文・弥生時代の寺中Ａ遺跡や、弥生・古墳時代の原口Ｂ遺跡がありますが、いずれもこれまで発掘調査が行われておらず実態は不明でした。

今回の調査は島原道路建設に伴うもので、1,000㎡余りを対象に記録保存調査を行いました。表土下の黒色の地層から弥生時代中期の土器片や縄文時代早期・晩期の土器片、古墳時代の土師器片が出土しました。また、さらに深い縄文時代頃の地層の間には、調査範囲の低い部分に溜まるような状態で、砂や小石の入り混じる別の地層が確認できました。石の成分を調べてもらったところ、遺跡より高所に堆積していた約２万年前の「礫石原（くれいしばる）火砕流」が、後の時代に土石流や流水によって流れ出し再び堆積したと考えられるようです。

④根引池遺跡（隣接地）（佐世保市江迎町）

根引池遺跡は佐世保市北部の江迎町に所在し、北松玄武岩台地に立地します。池周辺からは以前より旧石器時代や縄文時代の石器が多く採取され遺跡として周知されていましたが、平成 11 年に農道取り付け工事に伴う調査が池の西で行われ、旧石器時代の良好な石器接合資料が出土し注目を集めることとなりました。

今回の調査は西九州道路建設に伴う事前調査で、根引池遺跡の範囲には含まれていませんでしたが、遺跡の東に隣接することや事前の踏査で黒曜石片の採集があったことから調査を行うこととなりました。調査は５月～６月と２月に実施しました。

調査の結果、包含層と思われる土層の堆積が良好な地点もありましたが、出土した遺物は黒曜石片が数点と石鍋片１点、黒色土器１点、近世陶磁２点でした。この結果から、今回の調査地点は旧石器時代から縄文時代の生活の中心地からは離れていると考えられます。なお、石鍋片や黒色土器など古代の遺物は造成土下の旧表土層からの出土なので、古代の遺構が周辺にあるかどうかは不明です。

試掘坑土層

令和２年調査風景

令和３年出土遺物

⑤石屋洞穴（佐世保市江迎町）

令和３年調査区土層と出土遺物

令和２年調査風景

出土遺物

石屋洞穴は佐世保市北部の江迎川左岸の丘陵に位置します。周辺には第三期層の砂岩が岸壁として露出しているところが多くあり、洞窟状や岩陰状を呈する箇所もみられます。近くには、長谷禅門岩陰遺跡、前田岩陰遺跡など縄文時代の遺跡が知られています。

石屋洞穴は東に開口する谷地形最奥部に位置し、この谷には石屋洞穴以外にも岩陰や小洞穴が存在します。また、石屋洞穴は名前の由来となった石屋大納言の文字が壁に彫られ周辺の人たちの信仰の対象にもなっています。

当地は西九州道路の建設予定地であるため令和２年９月と令和３年３月に試掘調査を実施しました。令和２年９月の調査は石屋洞穴とそれに続く岩陰で行い、洞穴内から 20 数点の石器が出土しました。また、踏み固められたために硬くなった場所や、炉跡の可能性がある赤く変色した場所もありました。令和３年３月は石屋洞穴からやや離れた岩陰と小洞穴の調査を行い、岩陰の下から石器が２点出土しました。これらの結果から遺物が出土した地点を中心に令和３年度本調査を実施する予定です。

※ 試掘・範囲確認調査：遺跡の有無や規模・内容・範囲を調べる部分的な発掘調査のこと

⑥一乗院（いちじょういん）遺跡（雲仙市小浜町）

国指定名勝・温泉岳の西側、雲仙温泉の古湯・新湯間にある小さな丘に立地しています。丘の北側の麓には満明寺があり、南側の麓には旧八万地獄が広がっています。周辺の地質は安山岩の溶岩や火砕岩が、噴気や熱で変化した灰白色の風化土となっています。満明寺の由来書き等によると、701 年に行基によって温泉山鎮守四面宮（＝温泉神社）とともに温泉山満明寺として開山され、1640 年には島原の乱により焼失し温泉山一乗院として復興されたといいます。

今回は雲仙温泉園地整備工事に伴い、工事範囲である丘の頂上付近で、遺跡内容を調べる範囲確認調査を行いました。基壇等の寺院を構成する遺構をイメージしつつ掘り始めたのですが、薄い表土の下は灰白色の固い岩盤で、ツルハシが 3 本も折れるほどでした。また、丘の中央には龍造寺隆信の供養塔とされる五輪塔があります。丘の東と南に石垣が巡っているのですが、試掘坑から出土する遺物に中近世のものはなく全て昭和時代のものでした。少なくとも工事範囲における遺跡への影響はなさそうです。とにかく見晴らしのいい丘で、雲仙地獄や温泉街、雲仙岳を見渡すことのできる絶好の公園となりそうです。

龍造寺さま

清七地獄と観光ホテル

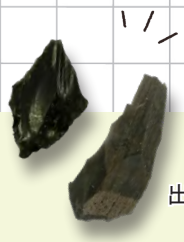
灰白色の岩盤

丘東側の石垣

調査風景

原口Ｂ遺跡隣接地 TP27 土層断面

⑦島原道路関連（島原市・雲仙市）


出土遺物

島原半島と諫早市中心部をつなぐ高規格道路・島原道路の建設に伴い、平成 30 年度から試掘・範囲確認調査を実施しています。令和 2 年度は島原市の原口Ｂ遺跡隣接地、灰ノ久保遺跡、下源在高野遺跡隣接地と雲仙市の岡城（夏峰城）跡隣接地の 4 か所で調査を行いました。

今回の調査では原口Ｂ遺跡隣接地と下源在高野遺跡隣接地で旧石器時代と見られる地層から遺物が見つかりました。遺物が見つかったのは約 3 万年前の姶良丹沢火山灰に由来すると考えられる地層で、佐賀県嬉野市を原産地とする黒曜石の剥片やナイフ型石器、安山岩質の剥片が見つかりました。特に下源在高野遺跡隣接地で見つかった剥片は狭い範囲に集中しており、今回の調査地周辺で石器を作っていた可能性があります。

精密分析・保存処理

今回は令和２年度の事例から、五島市・中島遺跡出土の“瑿（はそう）”をご紹介します！

瑿（はそう）

瑿（はそう）は手のひらに載せられるほどの大きさで、一見すると壺のような形ですが、側面に丸い孔（あな）があけられています。この孔に竹筒などをさして水や酒などを注ぐ道具として使われたと考えられています。

当センターで透過Ｘ線撮影を行ったところ、中に鉄がトグロを巻くように入っていることが分かりました。何のために鉄を入れたのか、現在のところ不明ですが、想像をかきたてられる一点です。

透過Ｘ線撮影写真

（左）横から見た内部（右）上から見た内部

なお、中の鉄は錆びを防止するために表面の土をクリーニングした後、薬品を塗布して強化しました。

このように長崎県埋蔵文化財センターでは、遺跡から出てきたモノについて、詳しく調べたり、長く保存できるような処理を施しています。

壱岐高校生徒の研究発表

埋蔵文化財センターは壱岐高校東アジア歴史・中国語コースに教育支援を行っていますが、平成29年度からはこうした支援の一環として、奈良大学が主催している全国高校生歴史フォーラムに研究論文を応募しています。応募開始以来、現場と実物にこだわった論文が高く評価されてきましたが、令和２年度は、定光寺前遺跡から出土した貿易陶磁器（中国大陸や朝鮮半島で作られた陶磁器）を用いて、平安時代の終わりから戦国時代にかけての壱岐の歴史を研究しました。この研究に用いた資料は、令和元年７月に定光寺前遺跡で発掘調査を行い、自分たちで見つけたものです。こうした貿易陶磁器の時期的な増減と製作地の内訳を、隣にある覩城（とじょう）跡で見つかった資料の増減と比べることで、壱岐の中世の歴史の解明を進めることができました。粘り強い研究の結果、応募総数114編の中から、上位の２編に贈られる賞である「奈良県知事賞」を受賞することができました。

オープン収蔵展示紹介

令和２年度のオープン収蔵展示は、近世長崎の「くらし」に関する出土品を現代の視点を交えて紹介する『長崎の近世×現代－出土品に見るくらしの今昔－』展、戦国末期から江戸時代に築かれた長崎の城跡や館跡を家紋入りの出土品等と共に紹介する『長崎の城と館－戦国の世から泰平の世へ－』展を開催しました。

現在は、『Life in Jomon－縄文時代の長崎－』展を開催中です。縄文時代の暮らしぶりや精神性が伝わる出土品を中心に、当センターでの保存処理を経て初めて公開される出土品なども展示しています。

＼＼開催中／／

第29回オープン収蔵展示

『Life in Jomon
－縄文時代の長崎－』

2021年
2/26（金）～6/27（日）
一支国博物館１階
オープン収蔵展示室